

和算わさん

数学と聞くと、西洋から入ってきたものというイメージがありますが、日本にも、古くから独自の数学、「和算」があったのをご存じでしょうか。

もともと数学は奈良時代に中国から伝えられ、江戸時代に発達しました。

和算の研究に貢献したのが、和算家の関孝和せきたかかずです。彼は独学で和算を究め、2変数文字方程式を解くための行列式、円弧の長さや円の面積、球の体積を求める理論を樹立しています。

和算は、武士だけでなく、庶民にも広まりました。布や米の計量、土地の面積、利子の計算など、日常で使う計算を扱った和算の入門書『塵劫記』は、大変な人気があったといえます。

また、難しい問題を書いた「算額」を神社に奉納するという習慣も生まれました。全国の神社には、江戸時代の算額が約800も残っているそうです。数学の問題を神さまに捧げるといえるのは、日本人ならではの発想といえます。

現代でも、奈良県の東大寺では「大仏が肩まで風呂に漬かるには何リットルのお湯が入る湯船が必要か」など、ユニークな算額が掲げられ、観光客に人気です。自信のある人は、挑戦してみてくださいはいかがでしょう。

今日の言葉 身近な数学に親しみましょ

関孝和 寛永17ころ～宝永5年(1640ころ～1708年)江戸中期の数学者。中国の数学に依存していた日本の数学を日本固有のものに高めた。筆算で精緻な円周率を算出。筆算式の代数学の確立や方程式・行列式の創始など、日本における数学研究を高めた。和算は関孝和から始まるとされる。著書に『発微算法』など。

今日の気づき

コメント